

チームワークが高まり集団的スキルが向上する体育の授業

ーネット型プレルボールによる協同学習を通してー

神奈川県立三ツ境養護学校 吉田 征人

【主題設定の理由】

平成 21 年告示の現行特別支援学校高等部学習指導要領¹⁾には、保健体育の第 2 段階の内容として「きまりやいろいろなスポーツのルールなどを守り、友達と協力し、進んで安全に運動をする。」と明記されており、「協力すること」の指導が求められている。また、体育分野として「体育理論」を含む 8 領域で示された平成 31 年告示の新特別支援学校高等部学習指導要領²⁾においても、球技を含む 6 領域の内容として、「協力すること」が示されている。

しかしながら、本校瀬谷西分教室での自身による体育授業(ネット型バレーボール)においては、ボールをつないで返球するなど協力すべき場面で、仲間を意識し、協力してプレーする動きがあまり見られず、生徒同士のコミュニケーションの取り方に課題を感じていた。そして、それは生徒のスキルの理解や習得が不十分であることに加え、生徒が、チームワーク(本研究では、仲間のことを意識し、協力して目的を達成するために行動することと定義する。)について、十分に理解できていなかったからであると考えられている。

具体的には、空中にあるボールを操作するバレーボールの技能的な難しさを十分に緩和できていなかったことやチームワークを高められるような協力の場面を設定できていなかったこと、さらにチームワークの必要性や高め方を指導できていなかったことなど、教員の指導に課題があると考えた。

そこで、涌井が提言している「仲間同士の関係を活性化させ、お互いの学びを高め合うグループでの教育技法のひとつ」³⁾である協同学習を展開することにより、生徒がお互いに協力できる場面を設定し、チームワークの必要性や高め方を指導できると考えた。

栗田⁴⁾は、協同学習を効果的に実践する際の 5 つの構成要素として、「協同的(互恵的)な相互依存性が設定されていること」、「グループ目標の達成に対する個人の責任が明確であること」、「課題に関連した対面での相互作用を営む機会が確保されていること」、「個人間、小集団内に必要とされる社会的スキルの指導と活用の奨励があること」、「グ

ループ活動に関する振り返り(改善手続き)の時間が確保されていること」を挙げている。したがって、この 5 つの構成要素を踏まえる形で授業を構想することとし、具体的には、チームで協力してボールをつなぐ関係を設定したり、チームの中での役割を明確化したりする授業を計画した。

また、東海林⁵⁾は、小学校 4 年生を対象とし、バレーボールと比べ、技能的に易しい教材であるネット型のプレルボール(ボールを打ちついたり、投げついたりすることを「プレル」といい、常にワンバウンドさせてラリーするスポーツ)を基にした易しいゲームによる協同学習の実践から、学習者同士の関わり合いの促進や返球成功率の向上(集団的スキルの向上)などの成果が見られたことを報告している。よって、本研究においては、プレルボールの授業を実践することで協同学習が効果的に行えると考えた。

以上のことから、プレルボールによる協同学習を展開することで、チームワークが高まるとともに集団的スキルも向上すると考え、本主題を設定した。

【研究目的】

知的障害教育部門高等部の体育授業におけるプレルボールによる協同学習の効果について、仮説の検証を通して検討し、成果と課題を明らかにする。

【研究方法】

理論研究を基にした仮説を設定の上、授業を実践し、仮説の検証結果を基に、授業の成果と課題について検討を行う。

【研究仮説】

知的障害教育部門高等部分教室の体育授業において、プレルボールによる協同学習を展開すれば、チームワークが高まるとともに集団的スキルも向上するであろう。

【検証授業】

- 1 期間 令和元年 9 月 5 日(木)～10 月 11 日(金)
- 2 場所 神奈川県立瀬谷西高等学校
教室・体育館・武道場
※瀬谷西高等学校内に分教室が設置されている。
- 3 対象 三ツ境養護学校知的障害部門
高等部分教室 第 1～3 学年(42 名)
- 4 単元名 いろいろなスポーツ
球技 ネット型「プレルボール」

5 主な学習内容

- チームの仲間に対して肯定的に関わること。
- レシーブ、トス、アタックのポイントを理解し、基本的なプレルの技能を身に付けること。

6 主な手立て

(1) 学習過程

表1のとおり7時間で計画した。

表1 学習過程

時	主な学習内容・活動				
1	オリエンテーション、行動目標の提示				
2	ためのゲーム、達人活動 ^{※1}				
3	プレルの練習、達人活動				
4	プレルの練習 達人活動	技能のポイントの全体共有	チーム練習	ゲーム1	
5				ゲーム2	
6					
7	ゲーム3～5、表彰式（ゲーム1～5はリーグ戦）				

※1 レシーバー、セッター、アタッカーのグループに分かれて行う学習。

体力づくりの時間に、1・2時間目の間にチームの役割分担を、5・6時間目の間にプレルによるパスやラリーの練習(2回)をいずれも15分程度実施した。

(2) 協同学習の具体

協同学習を効果的に実践する際の5つの構成要素を踏まえる形で、表2の学習活動を取り入れた。

表2 取り入れた学習活動

	5つの構成要素	授業で取り入れた学習活動
1	協同的な相互依存性の設定	協力してボールをつなぐ
2	社会的技能の指導と活用の奨励	協力に係る指導と行動目標の設定
3	責任の明確化	プレーとチーム運営に係る役割分担
4	相互作用を営む機会の確保	3人が1回ずつ触球して返球すること
5	振り返りの時間の確保	授業終盤での振り返り活動

(3) オリエンテーションの充実

オリエンテーションでは、映像を見せて、プレルボールのイメージを持たせるとともに、「フェアプレイニュース vol.106」⁶⁾を見せ、コミュニケーションの必要性に気付かせ、発問「どのような声かけをしたらチームワークが良くなるでしょうか。また、自分が言われて嬉しい言葉はどんな言葉でしょうか。」により、チームワークを高める言葉について考えさせた。また、生徒の言葉と関連させながら、単元の行動目標「チームワークを高める三カ条」を提示した(表3)。

表3 行動目標(チームワークを高める三カ条)

- ア 全員で協力して活動しよう!
- イ ほめよう、はげまそう、感謝しよう!
- ウ 最後まで責任を果たそう!

(4) プレルボールのルール修正

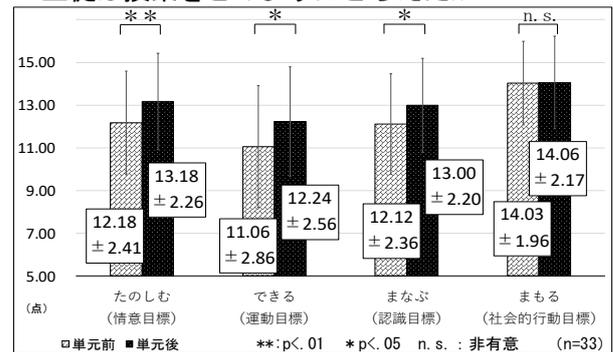
プレルボールは、個人的技能が容易なスポーツであるが、本研究ではルールを修正し、さら

に易しいスポーツとして実施した。

具体的には、1チーム3人制とし、個々のプレーヤーが必ず1回ずつボールに触る3回触球制のルール⁷⁾を採用し、全員のプレー参加を保障することとした。また、ポジションの固定により、役割を明確にすることとした。(セッターはトスのみ、レシーバーとアタッカーは、返球されたボールにより、適宜役割を交替した。)さらにプレルは、ボールを直接打ちつけるだけでなく、ボールをキャッチしてから打ちつけたり投げつけたりすることも認めることとした。

【結果と考察】

1 生徒は授業をどのようにとらえたか



※数値は平均値±標準偏差

図1 診断的・総括的評価の結果

※2 高田らの作成した「診断的・総括的評価」⁸⁾とは、生徒による授業評価であり、「たのしむ(情意目標)」「できる(運動目標)」「まなぶ(認識目標)」「まもる(社会的行動目標)」の4因子(項目群)、各因子5項目、合計20項目で構成されている。各項目に、はい(3点)、どちらでもない(2点)、いいえ(1点)で回答してもらい、各因子の合計得点の平均により、単元前後の授業評価の比較ができるようになっている。

図1は、単元の前後に実施した「診断的・総括的評価」の結果である。分散分析の結果、「たのしむ」において1%水準、「できる」「まなぶ」において、5%水準で有意な差が見られた。

(1) 「たのしむ」の因子

個々のプレーヤーが必ず1回ずつボールに触る3回触球制のルールにより傍観者がいなくなり、全員がプレーできたことが影響したと考えられる。

(2) 「できる」の因子

3種類のプレルを設定したことで、生徒が自分の能力に応じてプレーできたことや、仲間へのパスや相手コートに返球ができるようになり、ボールのつながりを実感できたことが影響したと考えられる。

(3) 「まなぶ」の因子

行動目標により応援が増えたことなどが、影響したと考えられる。

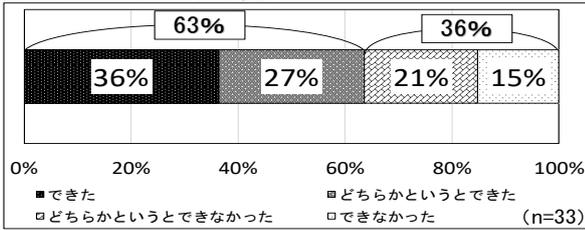
(4) 「まもる」の因子

単元前から得点が高かったためか、有意な差は見られなかった。

以上のことから、全体的に見て、生徒は今回

の授業を概ね肯定的にとらえたと考えられる。

2 チームワークは高まったか



※グラフの数値は、四捨五入しているため100%にならないことがある。

図2 「技能的なアドバイスができたか」に対する回答

図2は、事後アンケート「仲間に技能的なアドバイスができましたか」に対する回答結果である。

「できた」と「どちらかというときできた」を合わせた群（以降、「できた」群という。）は、63%であった。また、事後アンケートで、どのようなアドバイスをしたか聞いたところ、「素早く動くこと」「声かけをすること」など、技能のポイントとして全体で共有した内容や、「ワンバウンドしてから返そう」「ボールキャッチしていいよ」など、ルールに関するものが多かった。

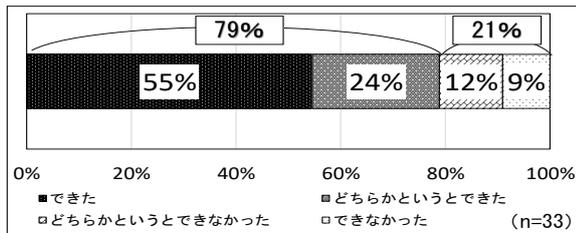


図3 「称賛やはげまし等ができたか」に対する回答

図3は、事後アンケート「仲間をほめたり、はげましたり、感謝できましたか」に対する回答結果である。

「できた」群は、79%であった。また、事後アンケートで、どのような声かけをしたか聞いたところ、「ナイス」「よかった」といった称賛や、「がんばれ」「ドンマイ」といったはげましが多く、「ありがとう」の感謝もあった。これは、行動目標「ほめよう、はげまそう、感謝しよう！」に対応しており、生徒が行動目標を意識していたと考えられる。

また、技能的なアドバイスと称賛やはげまし等ができなかった生徒の中に、仲間の上達を見取っていた生徒が3名いた。仲間を意識し、観察はできていたが、伝えることが難しかったと考えられる。

図2・3の結果からは、技能的なアドバイスと称賛やはげまし等ができなかった生徒がいることがわかり、現段階では、技能的なアドバイスと称賛やはげまし等を、生徒に一律に期待することは難しいと考えられる。

図4は、「仲間づくり調査票」⁹⁾※3の10項目の質問に対して、はい(3点)、どちらでもない(2点)、いいえ(1点)の3件法で生徒に回答してもらい、因子ごとの平均と総平均を求め、6時間の推移を示したものである。

総平均は、4時間目以降、授業成果の目安である2.5を上回り、単元終盤まで2.5以上を維持したことから仲間づくりの成果が見られたと考えられる。

以上のことから、4時間目以降にチームワークが高まったと考えられる。

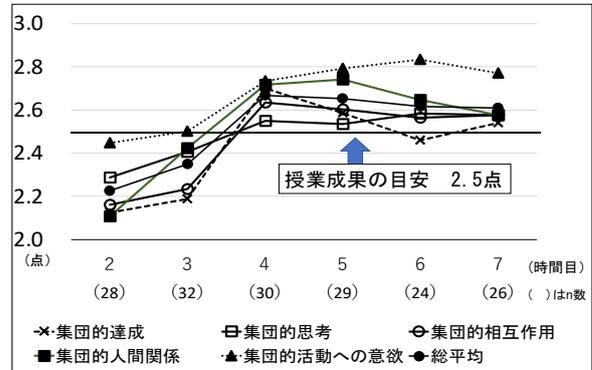


図4 仲間づくり調査票による評価の推移

※3 小松崎らが作成した集団的達成、集団的思考、集団的相互作用、集団的人間関係、集団的活動への意欲の5つの因子、各2項目(計10項目)からなる仲間づくりの成果を評価する指標である。

一方で、総平均は5時間目以降、若干の右肩下がり傾向が見られたため、ゲームの勝敗と仲間づくり調査票による評価との関連について検証してみた。5・6・7時間目のゲーム(5・6時間目は1ゲームのみ実施、7時間目は3ゲーム及び表彰式実施)において勝ち越したチーム(勝率5割以上)と負け越したチームについて、評価の総平均の分散分析(一要因参加者間)を行った結果(図5)、7時間目において、5%水準の有意な差が認められ、生徒の評価は、勝敗の影響を受ける可能性が示唆された。

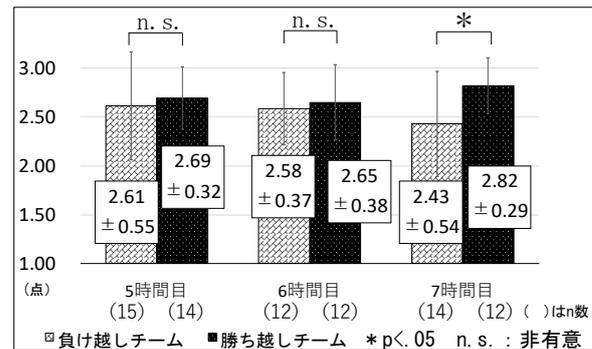


図5 勝ち越し及び負け越しチームの評価

3 集団的技能は向上したか

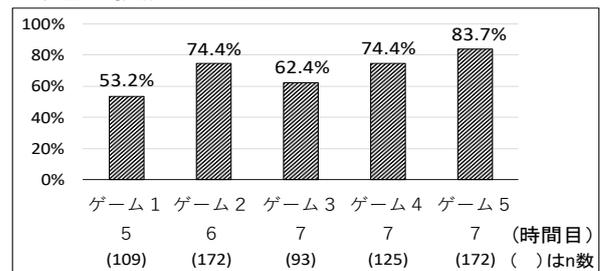


図6 返球成功率の推移

本研究では、集団的技能（3人でボールをつなぎ、相手コートに返球すること）の向上を検証するため、各ゲームの返球成功率（相手コートに返球できたプレー数を全プレー数で除した割合）を求め、その推移をグラフで示した（図6）。

ゲーム1（5時間目）では、返球成功率は53.2%であったが、徐々に返球成功率が向上し、ゲーム5（7時間目）には83.7%となった。

以上のことから、本研究における集団的技能は向上したと考えられる。

【研究のまとめ】

1 成果と課題

（1）修正したプレルボールの有効性

個々のプレーヤーが必ず1回ずつボールに触る3回触球制のルールによるプレー機会の保証と、技能レベルに応じた3種類のプレルの選択による技能的な難しさの緩和は、協同学習を進める上で有効であると考えられる。また、本単元のように生徒が初めて学習する段階では、すべてのポジションを固定することは、ポジションの役割を明確にし、理解させる上で有効であると考えられる。

（2）チームワークを高めていくために必要な指導

1時間目に、チームワークの必要性などを学習するオリエンテーションを設定したことにより、生徒にとってチームワークについて思考を深める機会となり、その後の協同学習の基盤になったと考えられる。また、明確な行動目標を設定し、中でも特に、「ほめよう、はげまそう、感謝しよう！」については、目指すべき行動が明確でわかりやすく、毎授業の振り返り活動の充実にもつながったと考えられる。

（3）個に応じたチームへの貢献

本研究においては、直接言葉では伝えることができない生徒が複数いた。一方で、伝えることはできなくても、仲間の上達を見取っていた生徒がいた。このことから、技能レベルに応じて選べる3種類のプレルの設定のように、チームへの貢献の仕方も、個に応じた方法を認め、設定することが有効であると考えられる。

（4）「負けたけど楽しい」と思える指導の工夫

今回のリーグ戦では、1チームが全敗となってしまった。そして、当然のことかもしれないが勝ち越したチームの授業評価は高く、負け越したチームの授業評価が低かった。しかし「負けたけど楽しかった」という感想があったことから、勝つことだけが目標にならないような授業にするとともに、力が拮抗するようチーム編成をする必要があると考える。

2 今後の展望

（1）協同学習の継続的な実施

本研究における協同学習は、生徒同士の関わり合いを促す上で有効であったと考えられる。生徒が協力する力を身に付けるために協同学習を継続的に行えるよう、3年間を見通した授業計画や他学部や他校種との交流を視野に入れた計画も重要であると考えられる。

（2）プレルボールにおける発展的な授業への展開

技能的に易しいと考えられるプレルボールを教材として扱ったことで、生徒は、ゲームを楽しめるようになった。今後、全員が得点できる場面を作るためには複数のポジションの役割の理解や技能の習得などが必要であると考えられる。

（3）分教室における体育授業

本研究では、瀬谷西高等学校に時間調整を依頼し、使用予定日時以外にも体育館を使用した。このように、体育施設の使用に係る事前の相談・調整は計画の幅を広げ、分教室の体育授業の充実を考える上で必要であると考えられる。

【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省『特別支援学校幼稚部教育要領特別支援学校小学部・中学部学習指導要領 高等部学習指導要領』2009年3月、pp.191-192
- 2) 文部科学省『特別支援学校高等部 学習指導要領』2019年2月、pp.226-231
- 3) 涌井恵「学習障害等のある子どもを含むグループにおける協同学習に関する研究動向と今後の課題ー通常の学級における研究・実践を中心にー」特殊教育学研究、51（4）、2013年、p.382
- 4) 栗田昇平「協同学習モデルの体育授業への適用過程とその成果」体育科教育学研究31（2）、2015年、p.50
- 5) 東海林沙貴、友添秀則、吉永武史「小学校中学年の体育授業におけるジグソーJPEの成果に関する研究：学習者同士の関わり合いを促すためのプレルボールを基にした易しいゲームの授業実践を通して」スポーツ教育学研究Vol.38、No.1、2018年、pp.11-12、p.16
- 6) 公益財団法人日本スポーツ協会ホームページより「JSP0 フェアプレイニュース vol.106」2019年3月11日
- 7) 岩田靖『ボール運動の教材を創るーゲームの魅力をクリックアップする授業づくりの探究ー』大修館書店、2016年3月、p.47
- 8) 高田俊也、岡澤祥訓、高橋健夫「体育授業を診断的・総括的に評価する」高橋健夫編『体育授業を観察評価する』明和出版、2003年10月、pp.8-11、p.159
- 9) 小松崎敏、高橋健夫「仲間づくりの成果を評価する」高橋健夫編『体育授業を観察評価する』明和出版、2003年10月、pp.16-19